

平成17年3月22日

第178回『21世紀塾』参考資料

(第18回提言)

山中城に「道の駅・東海道新接待茶屋」を

『21世紀塾』代表世話人 小野 徹

【問題提起】

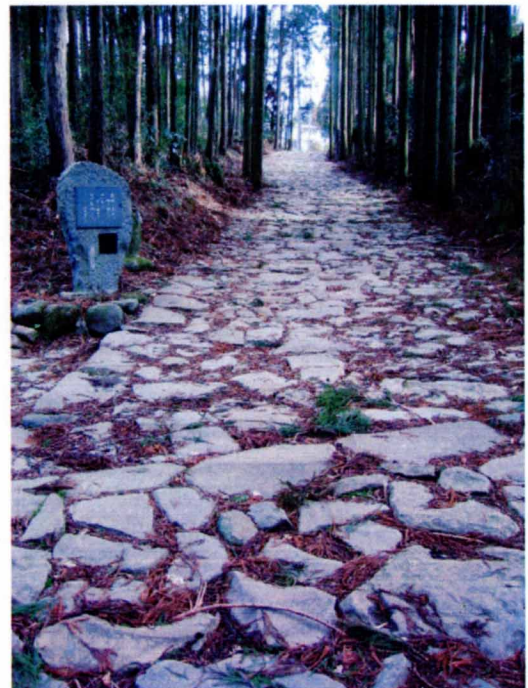
天下の景勝地・箱根を訪れる人は多い。

首都圏から近い上に、「万丈の山・千仞の谷」と評される険しい山容や峡谷、神秘的に水を湛え周囲の山々を映す芦ノ湖、西北には超然と聳える富士山という素晴らしいロケーション。それに、周囲には四季折々の表情を見せる豊かな自然が残され、温泉にも浸かれるとあっては、保養地としても、観光地としても賑わうのは、当たり前だろう。

しかし、「箱根」の真価は、何ととっても、日本の東西を分ける「天下の険」として刻まれた、数々の歴史にある。

政治の実権を、初めて、京の都から「越えがたき坂・箱根」を越えて関東に移してしまった源頼朝や執権北条氏、これを倒して再び京に幕府を開いた足利尊氏・義詮父子、戦国・下克上時代の幕を開き、韮山から小田原に攻め入った北条早雲、その後北条氏を討つため大軍を率いて攻め上がった豊臣・徳川連合軍、初代駐日総領事として下田から三島を経て江戸を目指したハリス、幕末の都の騒乱を鎮めに上洛した將軍徳川家茂・慶喜、「東征」と称して都から江戸へ下り、そのまま「東京」に居を構えられてしまった明治天皇の事跡等々、枚挙にいとまがない。

浄土真宗の祖・親鸞上人は東国より京に帰る途中、箱根権現に参詣しているし、三島とも縁深い連歌師・宗祇は箱根湯本で没している。



復元された石畳と、司馬遼太郎氏の箱根八里記念碑

豊臣秀吉は、茶人・千利休を同行させてこの坂を越え、長引く小田原攻めには、かの淀殿まで呼び寄せている。

徳川家康は、徳川家百年の計として、江戸から京まで、東海道に53次の宿駅制度を定め、沿道には一里塚を整備したが、まさにその道を使って、徳川3代將軍の継嗣を駿府の家康に直訴しようと、春日の局もこの険しい坂を越えた。

いずれにしろ、日本の歴史を動かしたこれほど多くの英傑が、息せき切って上り下りした道は、他にはないし、庶民までも「伊勢参り」と称してはこの坂を越えた。

つまり、箱根旧街道は、「日本一の歴史街道」であって、その意味では、昔のように、「歩かなければ」その良さは分からない。

車やバスに乗って、楽々？と上り下りしては、「強飯（こわめし）坂」や「題目坂」や「白ころがし坂」といった名がつくほどの急坂で、一年を通して霧や雨も多く、頑として旅人の前に立ちはだかった険しい箱根の自然・地理的な位置づけは理解できないし、往時の旅人の苦難など、到底わかりようがない。

かてて加えて、箱根の西坂は、富士山・駿河湾を一望する日本一の絶景だ。

天候に恵まれなかったからといって、この絶景を拝めず、また、往時の歴史を偲べなかったのでは、何のために箱根に来たのか分からない。

しかし、旅行者や旅行業者だけを責めるわけにはいかない。

というのは、かつて箱根の西坂には、「接待茶屋」という無料！の湯茶接待所があったという、恐るべき「もてなし心」があったにもかかわらず、現代はその精神が失われてしまっているからで、例えば「旧街道」を歩こうにも、石畳の整備以外は、ほとんどその対応がされていない。

例えば、――過去には、こうした書ききれないほどの「往来の歴史」を誇りながら、「歴史街道博物館」といった資料館がない。

中腹の「山中城跡」は、小田原の後北条氏の出城だが、「城」とはいうものの、「櫓（やぐら）」一つ建っていない。

芭蕉が、「霧しぐれ富士を見ぬ日ぞ面白き」と詠んだ通り、この西坂は「日本一の絶景だ」と言いながら、雲や霧や雨、また晴れていても富士



バスの乗降場所にふさわしい富士見平の芭蕉の句碑

山が見えない日も多い。

それなのに、「晴れた日の景色は、こんなに素晴らしいんだ。昔日の、想像を絶する旅人の苦衷も、この素晴らしい景観が、癒してくれたんだ」というものを見せる「富士山絶景眺望館」なるものがない。

— どうしたら、良いだろう。
まずは、観光客・来訪者に、歴史を噛み締めながら、「歩き体験」をしてもらおう。

「箱根八里」だからといって、これを踏破してほしいなどというつもりはない。

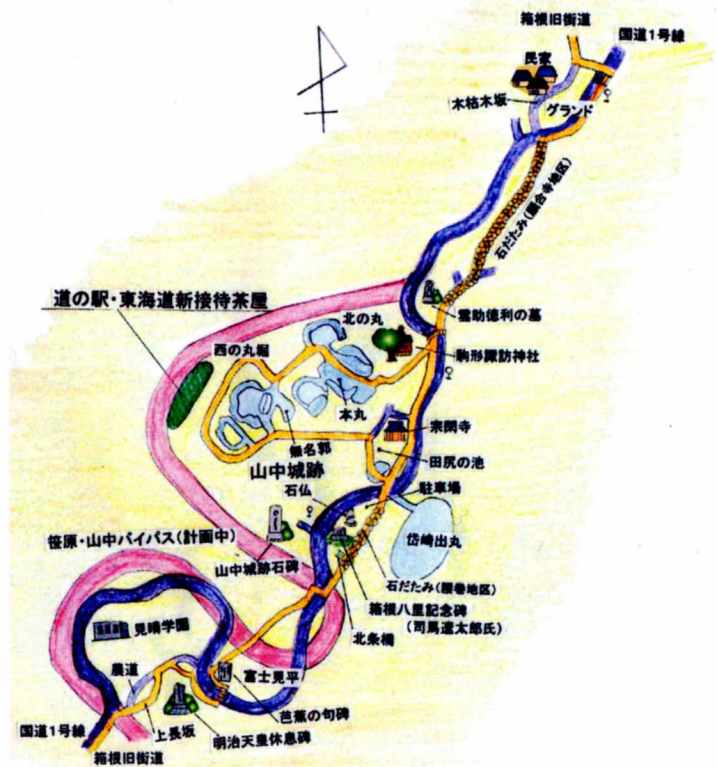
幸い、西坂の現道（国道1号線）は、ひたすら真っ直ぐに伸びていた旧街道を拡幅するのではなく、車が走り安いように、坂の傾斜に合わせ、旧街道に巻き付くように、何箇所かで交差しながら頂上に向かっていて、そのおかげで、旧街道は昔のままほとんど手付かずに残されているし、車も走っていない。

旧街道と、現道、それに新たに建設・計画中のバイパス道路が交差しているのだから、乗客は、好きな場所でバスを降りて、旧街道を歩き、次の交差点でバスに拾ってもらうことが、簡単にできる。

ある一定の基地を決めて、途中からそこまで歩く。あるいは、基地から歩いて、途中で拾ってもらうこともできる。

その基地が、富士山や駿河湾が一望でき、駐車場も広くとれ、「山中城」、「接待茶屋」、「箱根八里記念碑」等の新旧の史跡、また、すぐ下の「函南原生林」という癒しの場所にも近いところがあれば、この目的に一番合致しているといえるだろう。

いってみれば、これは、いわば「道の駅・新接待茶屋」であって、私はその基地として、計画中の「笹原・山中バイパス」と、「山中城・西の丸」の間に造ることを提案したい。



まっすぐに伸びる旧街道を、新道・バイパス道路が巡っている(山中地区)

「山中城」は、西坂の中間よりやや上に位置するものの、上にも、下にも、新旧の交差点があり、「石畳」歩きの体験ができる一般向きのコースもできるし、健脚向きにもう少し長く歩くコースも、自由に設定できる。

勿論、乗用車で来たにしても、車を置いてすぐ横の「山中城跡」へ上がるにも便利だし、旧街道の「石畳」にも近い。

そもそも、今は無くなってしまったとはいえ、「接待茶屋」は、昔の「道の駅」そのものであり、その精神は、いわば三島人の「もてなし心」のシンボル・誇りでもあって、往時の場所からあまり離れては、歴史的意味あいが薄れる。

ところで、残念ながら、今の「山中城」は「山中城跡」であって、何の建物も建っていない。

これは、「山中城」が国の史跡指定を受けているため、史実に基づいたものでなければ、再建できないことによる。

しかしながら、この「山中城」は、今から400年も昔の、しかも敗れた小田原・後北条方の単なる出城であるので、史実を証する図面などが発見される可能性は、皆無だ。

ということは、1000年先になつても、1,000年先になつても、この「城跡」に、中世・戦国の歴史を髣髴させる山城の全貌は、現れないことになる。

もともとこの地点に出城が築かれたのは、韮山・足柄の出城とともに、駿府・沼津方面から押し寄せてくる敵を一早く発見するため、それ故に、一番高い西



山中城西の丸下から望む富士山

の丸の砦の上からは、駿河湾の海岸線が一望に見渡せるし、ここが一番の見晴らしである証拠に、すぐ境界を外れたところには、鉄塔・電波塔が林立している。

漏れ伝わるところによれば、「笹原・山中バイパス」は、「山中城の西の丸」の外側を、ぐるっと迂回するように計画されているという。



山中城西の丸下から望む駿河湾

となれば、もっとも素晴らしい景観をもち、要発掘調査の「遺跡指定地」ではあるが、山中城とは指呼の間にあるこの挟まれた地点に、「山中城跡」では未来永劫にできないと思われる「砦風」の「道の駅」を作ったらどうだろうか。

そうならば、「山中城」の目玉である、滑りやすい赤土を利用した防御用の「畝堀」にも近く、出城とはいえよく戦い、それを惜しんで両軍の将が共に弔われているという激しい攻防戦の様子なども、現代風のテクノロジーを駆使すれば、日本一の「歴史街道博物館」の「生きた史跡」として活用することもできるだろう。

また、この「歴史街道博物館」と「富士山絶景眺望館」とを併せれば、霧や雨の中をせっかく当地に見えた方々にも、少しは喜んでいただけると思う。

かてて加えて、歩く人に楽しみを与える「道の駅」として、観光客・来訪者に、ゆったりとした時間を過ごしてもらうことができれば、首都圏でも著名な箱根西坂で採れる旬の野菜を味わってもらえるだろうし、買っていただくにも便利になるから、地元にとってもありがたい話となるだろう。

歴史と景観を備え、わが国の交通史上最も重要な道「箱根旧街道」に、「道の駅・東海道新接待茶屋」を建設して、じっくりと「歴史街道」を歩く楽しみを与えようではないか。

(注) この提言書の「道の駅・東海道新接待茶屋」の建設場所については、三島市山中商工組合組合長の藤沼昌則氏から、ご助言をいただきました。



後北条氏が築城に使った山中城の畝堀



宗閑寺には両軍の将が共に弔われている